近世京都日蓮宗立本寺，妙満寺，妙蓮寺の伽藍配置 ON THE PLAN OF THE COMPOUND IN RYUHONJI, MYOMANJI AND MYORENJI BELONGING TO NICHIREN SECT AT KYOTO IN MODERN TIMES

丹羽博亨*

Hiroyuki NIWA

In this paper, I selected three temples out of 16 head temples of Nichiren sect at Kyoto as follows. Those are 1) Ryuhonji where Soshi-Do was disposed facing Kishi-Bojin-Do (Setsu-Do) in front of Shaka-Do, 2) Myomanji, where Shaka-Do was disposed right-angled to Soshi-Do and 3) Myorenji, where Shaka-Do and Soshi-Do was disposed from east to west facing to the south. Because I'd like to research on the process of changes of principal hall and factors of the disposition of the Buddhist temples. As the result, substantial three items, which were interpreted in this paper, were clarified.

Keywords : *plan of compound, Buddhist temples, Shaka-Do, Soshi-Do, Setsu-Do*

配置計画，仏教寺院，釈迦堂，祖師堂，刹堂

序

櫻井敏雄氏は『鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究』¹⁾の「名所図会等にみられる大寺の伽藍」の項において、本堂前面に祖師堂と鬼子母神堂（刹堂）が軸線をはさんで対峙させる配置として本隠寺，頂妙寺，立本寺，本堂と祖師堂を矩の手に配置させた本能寺，本法寺，妙満寺，そして，本堂と祖師堂を併置させた本隆寺，妙蓮寺があることについて指摘されている。

前稿²⁾では京都日蓮宗16箇本山寺院の内，妙顕寺においては御影堂（祖師堂）が最初に建立され，妙覚寺，要法寺においては釈迦堂よりも御影堂の規模を拡大していることに言及し，伽藍配置の要因についても考察した。

本稿では京都日蓮宗16箇本山寺院の内，立本寺（京都市上京区），妙満寺（京都市左京区），妙蓮寺（京都市上京区）をとりあげ，主要堂宇の推移の過程と伽藍配置の要因について考察する。

1. 文字曼荼羅と伽藍配置の要因

『法華経見宝塔品』に虚空に宝塔が涌出し，その宝塔の中に妙法蓮華経を中心に釈尊と多宝仏が左右に坐し，釈尊の脇士である本化地涌の四大菩薩がひかえ，迹化と他方より来た諸菩薩等はずっと下からこれらの菩薩を仰ぎ見る，いわゆる虚空会の儀式が説かれている。

多宝如来は東方宝浄世界に住し，宝塔は東方宝浄世界

から法華会に来至している。したがって，虚空会上の宝塔は西向きとなり，宝塔内の釈尊は北の上座（右側），多宝如来は南の下座（左側）に位置する。

日蓮は法華経に説かれている虚空会の図景を借りて具象化した文字曼荼羅を図顕し，多くの弟子，檀越に授与している。

日蓮書写の文字曼荼羅の立体的配座は，右側の上座に釈尊，左側の下座に多宝の二仏が並座し，この師たる釈尊，多宝の二仏に向かっているのが，弟子たる上行菩薩，十羅刹女等であるので，この場合は左右の関係が逆となり，左側が上座となり，本化地涌首導の上行菩薩が左側の上座に勧請されている。

この左右の関係は日我（1586 歿）の『化儀秘決』に『是れは何も仏の方より云ふ時の方角なり，参る人の為には右は左なり』³⁾とあり，釈尊，多宝の二仏の側（正面から見た場合）からながめた場合である。

日朗門流相伝の日経（1473 歿）記『御本尊口伝面授私』に「左^リニ御影堂ヲ造中事^ハ忝^モ大聖人^ハ其本地^ヲ尋中^{セハ}上行菩薩^{ニテ}御座故^ニ本地^ノ文字^ニ約^シ左^ニ御影^ヲ立^テ申事^モ有^リ」⁴⁾とあり，大聖人（日蓮）の本地を上行菩薩とする意から，「本地ノ文字」，すなわち日蓮書写の文字曼荼羅に約して御影堂（祖師堂）を左側（仏の方より云ふ時の方角）に配するとしている。

京都日蓮宗16箇本山寺院の内，9箇本山寺院が釈迦

* 広島工業大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Hiroshima Institute of Technology, Dr. Eng.

堂を右側、祖師堂を左側（仏の方より云ふ時の方角）に配している。

しかし、日蓮歿後、日蓮への追慕想起の念が強い寺院では、妙覚寺、要法寺のように釈迦堂より御影堂（祖師堂）の規模を大きくした本山寺院もあった。そして、妙蓮寺と本隆寺の2箇本山寺院にあっては、釈迦堂と御影堂の配置を前述の9箇本山寺院とは逆に配している。

以下、京都16箇本山寺院の内、3主要本山寺院の伽藍配置の要因について考察する。

2. 立本寺における主要堂宇と配置

立本寺は妙顕寺第4代日実（1378歿）を開祖とし、明徳4年（1393）に押小路堀河の西南の地に堂舎を建立した時を創立としている。

天文5年（1536）の天文法華の乱により焼失、一時堺へ逃れた後、天文13年（1544）に新町三条に再興している。

文禄年中（1592～96）に京極今出川に移っている⁵⁾。

『本化別頭仏祖統記』に「寛文元年辛丑立本寺火師援之ヲ振ビテ力ヲ一ニ新ス大殿ヲ」⁶⁾と寛文元年（1661）に焼失し、第20代日審（1666歿）の代に大殿（園林堂）が建立され、延享年間（1681～83）には祖師堂が建立されている⁷⁾。

京極今出川における伽藍配置は貞享3年（1686）刊の『新編法華霊場記』に所収されている立本寺境内景観⁸⁾（図一1）によって知ることができる。

そして、元禄15年（1702）脱稿の『山州名跡志』に門ハ西向ナリ。

堂ハ南面ナリ。

祖師堂ハ在リ堂ノ東南ニ、西面ス。

十羅刹堂ハ在リ堂ノ西南ニ、東面ス。

経蔵ハ在リ祖師堂ノ南ニ、西面ス。

七面明神ノ社ハ在リ経蔵ノ南池ノ中ニ、西面ス。

三十番神ノ社ハ在リ仏殿ノ東ニ、西面ス⁹⁾。

とある。

京極今出川当時は寺地の西側に京極通（現在の寺町通）に向かって表門が設けられ、釈迦堂は南面し、その前方

図一1 立本寺境内景観

東南に西面して祖師堂、西南に東面して刹堂が鼎立して配され、釈迦堂の背後に方丈（本院）、祖師堂の背後に番神社が配されている。七面明神社は表門の正面にある池の中に配されている。そして、釈迦堂の正面には二王門（楼門）が配され、二王門を入った右側に経蔵、左側に鐘樓が配されている。しかし、『山州名跡志』には二王門が脱落しているが、記載もれであると考えられる。

主要堂宇たる釈迦堂を南面させ、その正面に二王門（楼門）を配し、釈迦堂に向かって右側に祖師堂、左側に刹堂を配している京都日蓮宗本山寺院は本圀寺（京都市下京区当時）¹⁰⁾、頂妙寺（京都市左京区）に見ることができる。

この主要堂宇の配置の要因は、前述の日朗門流相伝の日経（1473歿）記『御本尊口伝面授私』にある「本地ノ文字ニ約シ」、すなわち日蓮書写の文字曼荼羅の立体的配座に則って、大聖人（日蓮）の本地を上行菩薩とする意から、釈迦堂の前方、左側に御影堂（祖師堂）、右側に刹堂を配したものであると考えられる。この左右の関係は「仏の方より云ふ時の方角」である。

そして、刹堂が中枢伽藍の主要堂宇に配された理由は、日蓮の守護神のなかでも十羅刹女は極めて重要な地位におかれており¹¹⁾、京都日蓮宗一致派においては¹²⁾、応永25年（1418）の妙顕寺の『起請文事』等に「法華經中三宝、十羅刹女、三十番神、并五代祖師」¹³⁾とあり、当時起請文に十羅刹女を請することが通例となったほど¹⁴⁾、十羅刹女を法華經の守護神とする風が一般的であったがためと考えられる。

その後、立本寺は宝永5年（1708）3月に類焼し、現在地内野に移転している。

『本化別頭仏祖統記』に「京兆立本寺二十四代日忍上人伝」に「宝永五年戊子洛中失火ヲ立本寺モ亦烏有トナル矣。洛下ノ繁華祝融ノ之崇無ク由リ避ルニ之ヲ。師太ク憂フ之ヲ。告グテ官ニ易ム地ヲ今之内野ノ紺園是也。師無ク暑ト無ク寒ト躬自逡巡シテ聚ル材ヲ曳キ石ヲ遂ニ復テ舊觀ニ」¹⁵⁾とあり、第24代日忍（1724歿）の代に再興されている。

前地京極今出川で類焼を免れた堂宇は移築され再建されているが、その堂宇は明治年間記『本坊及塔中建物明細表』によると次のとおりである。

- 一、祖師堂 宝永五戊子年再建 梁行七間半 桁行八間
- 一、開祖廟 宝永五戊子年再建 梁行一間四尺五寸 桁行一間半
- 一、鐘樓堂 宝永五戊子年再建 梁行二間 桁行二間
- 一、本堂前井戸屋形 宝永五戊子年再建 梁行一間 桁行一間
- 一、経蔵 宝永五戊子年再建 梁行三間一尺五寸四分 桁行三間一尺五寸四分

であった¹⁶⁾。

その後、同書によると元文4年（1739）に鎮守堂、宝暦5年（1755）には梁行18間、桁行13間半の本堂、安

永7年(1778)には明き3間の表門、行者部屋、門番部屋が再建されている。

内野における伽藍配置は宝暦4年(1754)脱稿の『山城名跡巡行志』に

門 東向又東西裏門ニ所アリ。

本堂 南向。

祖堂刹堂 在_リ堂前東西ニ。

七面 在_リ祖堂南ニ。

番神ノ祠 同¹⁷⁾。

とあり、そして、寛政元年(1789)の「立本寺伽藍配置図」¹⁸⁾(図-2)と天明7年(1787)刊の『都名所図会拾遺』に所収されている「立本寺境内景觀」¹⁹⁾(図-3)によって知ることができる。

図-2 立本寺伽藍配置図

図-3 立本寺境内景觀

寛政元年(1789)の「立本寺伽藍配置図」には本堂について次のように記載されている。

一、本堂 桁行拾貳間 梁行拾壹間 前拝後拝共 桁行五間 半奥江貳間半宛有之 惣鉢桁形式手先組物二重垂木 仏壇之上小組 折上天井 内陣格天井板違 其外妻入母屋并前後拝共桁形墓股等彫物有之

としている。前述の「本坊及塔中建物明細表」によると祖師堂の規模は梁行7間半、桁行8間、刹堂は梁行6間半、桁行6間半とあり、本堂(釈迦堂)の規模が最も大きく、中心的堂宇としての性格が強かったものと考えられる。また、同配置図に「当寺境内建物右絵図之通有来候処鬼子母神堂儀者天明三卯年十月焼失仕候」とあり、天明3年(1783)に鬼子母神堂は焼失している。そして、同書によると刹堂(鬼子母神堂)は文化8年(1811)に再建されている。

前地京極今出川の伽藍配置と異なっていることは、京極今出川當時は寺地の西側の京極通に向かって表門を設けていたが、内野に移転後は寺地の東、南北に走る七本松通に向けて表門を構え、二王門(楼門)は配されていない。そして、祖師堂と刹堂の位置が入れ替っていることである。

内野において二王門(楼門)を配さない理由は不明であるが、妙覚寺(京都市上京区)の場合、元禄16年(1703)の『二王門再興帳序』によると、檀越の助力も減って、伽藍の修理もできないために二王門(楼門)は元禄16年より42年も前にたたんでいたが、「二王門ノスタレコトヲ都鄙門流ノ真俗等ナゲキ呉場ニ不_三相応ニヨシ諸人參詣シテハロズサミトス故ニ」²⁰⁾と二王門(楼門)が再興されており、二王門(楼門)は重要な伽藍の一つであった。

しかし、立本寺の場合、前地京極今出川では二王門(楼門)の軸線上に本堂(釈迦堂)が位置する伽藍配置であったが、内野に移転後には二王門(楼門)は再建されず、軸線が崩れ、表門が正門たる二王門(楼門)を兼ねるに至っている。

そして、刹堂は鬼子母神堂と改称されているが、その理由は、近世に至って布教の手段として祈禱法が飛躍的な発展を示し、祈禱本尊として鬼子母神が定められ²¹⁾、十羅刹女より鬼子母神が主位となったがためと考えられる。

日蓮書写の文字曼荼羅では、正面に向かって左側に十羅刹女、右側に鬼子母神が勧請されていることから、鬼子母神堂を右側に配したと考えられる。

内野に移転後、祖師堂と鬼子母神堂の配置替えがなされた理由は、二王門(楼門)が再建されなかったこと、そして、守護神が十羅刹女から鬼子母神へと変換えされたがためと考えられる²²⁾。

3. 妙満寺における主要堂宇と配置

妙満寺は永徳元年（1381）に日什（1392 歿）によって開創、翌 2 年（1392）に天王寺屋通妙から屋敷地を寄進されて、ここに草庵を構えた。そして、康応元年（1389）に室町の草庵を妙塔山妙満寺と号した。その後、錦小路、東洞院に位置していたが、天文 5 年（1536）の天文法華の乱によって焼失し、天文 16 年（1547）に綾小路堀川西に再建された。天正 11 年（1583）頃豊臣秀吉の命によって寺町二条下町に移転させられている²³⁾。

寺町二条における伽藍配置は延宝 6 年（1678）6 月の「美濃守様御本陣 妙満寺絵図」²⁴⁾（図—4）によって知ることができる。なお、この妙満寺絵図より「妙満寺主要堂宇配置関係図」²⁵⁾（図—5）を作製した。

そして、元禄 15 年（1702）脱稿の『山州名跡志』に

門^ハ西向ナリ。

堂^ハ南面ナリ。

祖師堂^ハ在^リ堂前ニ、西面ス。

番神ノ社^ハ在^リ堂ノ西ニ、南面ス²⁶⁾。

とある。

妙満寺の寺地は京極通（現在の寺町通）の東側に位置し、東側に向けて表門があり、二王門（楼門）は設けられていない。本堂（釈迦堂）は南面し、釈迦堂の東南の位置に西面する高祖堂（祖師堂）が配され、釈迦堂の西側に番神社と同拝殿、同鳥居が配されている。そして、番神社の鳥居の西側に三光堂が配されている。しかし、刹堂（鬼子母神堂）は配されていない。

前述の「美濃守様御本陣 妙満寺絵図」によれば中樞伽藍の主要堂宇の規模は

- 一、本堂正面 5 間 奥行 7 間 前拝 3 間 後拝 1 間

図—4 美濃守様御本陣妙満寺絵図

図—5 妙満寺主要堂宇配置関係

- 一、高祖堂（祖師堂）正面 3 間 奥行 4 間 前拝 1 間

- 一、番神社拝殿 正面 3 間 奥行 3 間

とあり、本堂（釈迦堂）の規模は高祖堂（祖師堂）より大きく、中心的堂宇としての性格が強かったものと考えられる。そして、番神社と三光堂は、ほぼ同規模に描かれている。しかし、番神社拝殿は正面 3 間、奥行 3 間と規模は大きい。

中樞伽藍の主要堂宇たる釈迦堂は南面し、釈迦堂に向かって右側に高祖堂（祖師堂）を配することは、前述の立本寺の伽藍配置と同様に日蓮書写の文字曼荼羅の立体的配座に則って配されたものと考えられる。

しかし、立本寺の伽藍配置と異なるところは、守護神堂である。立本寺の守護神堂は刹堂（鬼子母神堂）であったが、日蓮宗勝劣派に属する初期妙満寺においては三光堂であったと考えられる。

三光堂が中樞伽藍の主要堂宇となった理由は次のように考えられる。

日蓮の身延山での生活は日朝（1500 歿）の『元祖化

導記』によれば、早旦（早朝）には持仏堂において勤経をなし、その後、日天の御前において方便品、寿量品の要品を誦し、日中には法門談義をおこない、日夕にも勤経をおこなっている。早旦（早朝）における日天の御前の勤経、すなわち諸天善神信仰がすでにとり入れられていた²⁷⁾。

宝徳元年（1449）日叡記『日什聖人朝夕勤行掟之事』に「亦二座目ニ天ノ勤ノ時」²⁸⁾とあり、妙満寺開祖日什も天の勤めとして継承している。

この諸天善神信仰の場が、三光堂へと発展し、中樞伽藍の主要堂宇となったと考えられる²⁹⁾。

滝谷妙成寺（石川県羽咋市滝谷）の「妙成寺境内配置図」³⁰⁾（図—6）によると、中央に南面して本堂（釈迦堂）、本堂に向かって左側に鎮守堂（三光

図—6 妙成寺境内配置図

堂), 右側に開山堂(祖師堂)が併置されている。中枢伽藍の主要堂宇を併置する配置が妙満寺の祖型と考えられる。しかし, 市街地にある寺地には限度があることから, 釈迦堂, 祖師堂, 守護神堂(三光堂)を鼎立させる配置をとったものと考えられる。

しかし, 日蓮宗の京都進出の端緒を開いた日像(1342歿)によって, 日蓮の守護神とされていた天照, 八幡の二神の観念と結合させた三十番神がとり入れられ, 法華神道として重視されるようになった。

承応3年(1654)の真陽書『禁断義十卷』に

日蓮の時代に三十番神を勧請したることなし, 今も関東の日蓮宗の寺には多分番神を勧請せず, 京都において日蓮滅後に日蓮党談合して卅番神を立つと見えたり³¹⁾, ……

とあり, また, 貞教元年(1684)刊『雍州府志』に

日蓮宗寺院に悉くこれを勧請す, 日蓮上人の時伊勢・八幡の二神を勧請して法ヶ守護神となし日像上人の時三十社の神を勧請して一月三十日のうち一日ごとに守護神をおく³²⁾。

とあり, 京都日蓮宗本山寺院の内, 要法寺, 寂光寺を除いた全本山寺院に三十番神社が建立されている。

日蓮宗勝劣派に属する本興寺(尼崎市開明町)の場合, 天和3年(1683)以前のものとされる「本興寺伽藍配置図」³³⁾(図—7)によると本堂(釈迦堂)は南面し, 本堂に向かって右側に祖師堂, 左側に鐘楼堂が鼎立し, 鐘楼堂の南側に三光堂と同拝殿が配され, 三光堂は中枢伽藍の主要堂宇に近い位置に配されている。三光堂内には中央に三十番神, 左側に日天・月天・明星, 右側に大黒天, 鬼子母神が安置されており, その中心は三十番神となっているが, その堂宇は三光堂と呼称されている³⁴⁾。このことから推察して, 日蓮宗勝劣派寺院の場合, ある時期より, 日天・月天・明星の三光天は三十番神に包含されるようになったものと考えられる。

妙満寺の場合も, ある時期より三光堂より番神社の方が重要視されるようになり, 番神社は本堂(釈迦堂)の西側に配され, 番神社拝殿は正面3間, 奥行き3間の規模となり, 三光堂は形骸化したものと考えられる。そし

図—7 本興寺伽藍配置図

て, 中枢伽藍の主要堂宇たる釈迦堂, 祖師堂, 三光堂が鼎立する配置が崩れたものと考えられる。

その後, 宝永5年(1708)に油小路より出た失火によって類焼している。その後の伽藍配置は「妙満寺伽藍配置図」³⁵⁾(図—8)によると, 中枢伽藍の主要堂宇の配置は類焼以前と同様であるが, 本堂(釈迦堂)の裏手に太鼓堂が設けられ, 祖師堂の奥行きは5間となり, 1間程拡大されている。そして, 三光堂は妙日堂と改称され, その規模は桁行3尺8寸, 梁行2尺2寸となっている³⁶⁾。

4. 妙蓮寺における主要堂宇と配置

創立は永仁3年(1295)頃, 日像の教化をうけた五条の酒屋, 柳屋仲興が延慶2年(1309)西洞院五条の屋敷に庵を設けたことに始まり, 妙法蓮華寺と号した。応永

図—8 妙満寺伽藍配置図

年中(1394~1427)に日慶、日存、日道、日隆らが、この綾小路五条に草庵を構えていた。日慶(1478歿)は日像の故地に因んで綾小路大宮に柳屋の外護で寺を再興し、妙法蓮華寺を略して妙蓮寺と号した。日慶は文明5年(1473)寺内に道輪寺学室を設け、日忠(1503歿)を学頭に招請している。

天文5年(1536)の天文法華の乱によって焼失し、堺の法華寺に一時退いたが、やがて天文11年(1542)帰洛し、大宮西小路に再興した。天正年間(1573~91)に豊臣秀吉の命によって現在地寺ノ内に移転させられた³⁷⁾。

現在地に寺基を移した後、『妙蓮寺開闢再興略記』に「大方丈は聚楽庵却の建物拝領して建る所。又慶長年中日源上人の代、大仏殿建立の残木を拝領し本堂普請成就す。上棟の当日は元和元年五月七日なり。夫より以来伽藍繁栄し祖堂、鐘楼、三重宝塔、大門、浴室、鼓楼、宝蔵、僧坊二十七院、学室道輪寺等、凡て蘭若に在所の堂塔巍々赫々として薨をつらね、結構莊嚴全備せり。」³⁸⁾とあり、第14代日源(1622歿)の代に本堂(釈迦堂)が建立され、第15代日然(1649歿)の代に祖堂(祖師堂)等が建立され伽藍が整備されている。

元禄15年(1702)脱稿の『山州名跡志』には

門^ハ南向ナリ。

堂モ同ゾ。

祖師堂^ハ在^リ仏殿ノ西ニ、南向ナリ。

三重ノ塔^ハ在^リ祖堂ノ南ニ、東向ナリ。

番神ノ社^ハ在^リ塔ノ南ニ、東向ナリ。

鳥居モ同ジ。拝殿モ同ジ³⁹⁾。

とあり、堂、すなわち釈迦堂は南面し、祖師堂は釈迦堂の西に南面し両堂は併置されている。三重の塔は祖師堂の南に東面し、番神社は三重の塔の南に東面して配されている。しかし、前述の妙満寺と同様に二王門(楼門)はなく、刹堂は記載されていない。

この伽藍配置は寛延元年(1748)の「妙蓮寺伽藍配置図」⁴⁰⁾(図-9)とも合致する。

『境内諸堂建物』によると主要堂宇は次のようである。

- 一. 本堂 石燈籠一対本堂前有之 梁行十二間 桁行十三間 高六丈 前拝後拝 高欄獅子口 祖師堂同断 右日源上人御建立
- 一. 祖師堂 梁間八間 桁行七間二尺 高四丈六尺 前拝三間出 後拝同断 階前有之 柱総丸柱枅形虹梁海老虹梁大瓶束藁股 絵様肘木三手先斗栱 四方唐戸 四方高欄擬 内陣部戸 屋根瓦葺切妻破風 狐格子懸魚 南方に獅子口一ツ破風際 前方葺オロシ獅子口一ツアリ 右日然上人御建立 天明焼失後末再建
- 一. 三重宝塔 高サ五丈但シ九輪マデ三間四方彩色ノ扇垂木三手先斗栱 四方縁 屋根四方流 唐金九輪 右建立細川丹波守内室瑞光院栄応妙宗禅尼 寛永七年建立⁴¹⁾

図-9 妙蓮寺伽藍配置図

とあり、本堂(釈迦堂)は桁行13間、梁行12間、高さ6丈で、祖師堂は桁行7間2尺、梁行8間、高さ4丈6尺で釈迦堂の規模の方が大きく、中心的堂宇としての性格が強かったものと考えられるが、祖師堂は「大瓶束藁股絵様肘木三手先斗栱」とあることから、贅をつくしたづくりであったようである。

妙蓮寺の中核伽藍の主要堂宇の配置は本堂(釈迦堂)の右側(仏の方より云ふ時の方角)に祖師堂を併置させているが、前述の立本寺に妙満寺の祖師堂の位置とは逆となっている。その理由は次のように考えられる。

京都本禅寺第10代日求(1655歿)の寛永9年(1632)の『童蒙懷覧集』の「以^テ高祖ノ御影ヲ奉^ル坐^ス右方ニ事」に

靈山說法ノ道場既ニ南向也、故ニ諸堂悉ク南向、南向ノ時ノ右座ハ乾也、然^ルニ高祖ノ所在ハ良也、御釈ニ云、丑寅ノ廊ニテ可^ク待候ト云云。

との質問に対して、同書に

是^レ順^ニ国方ニ構^ス南向ニ也。其故ハ此国ノ方儀、天子必ズ南向也。故ニ任^セテ国方ニ命^ス法王ヲシテ南面セ也。

と、伽藍配置は南面を基本としているが、南面の場合、同書に

南向ノ時ニ右座ハ乾也、然^ルニ高祖ノ所在ハ良也、御釈ニ云、丑寅ノ廊ニテ可^ク待候ト云云。

と、高祖(日蓮)の所在は丑寅(北東)とされているが、右座は乾(北西)の方角になってしまう。したがって同書に

自_リ宝塔品_ニ至_ル属累品_ニ、虚空会_ノ儀相_ハ雖_モ有_リト種種_ノ相伝_ニ、任_シ元祖_ノ掟_ニ堅_ク西面_ト習_フ也⁴²⁾。

と、南面の場合でも虚空会の儀相に順じ西向きを基に、高祖（日蓮）の所在は右側であるとしている。

この記述は高祖（日蓮）の御影の安置についてのものであるが、妙蓮寺の祖師堂を右側（仏の方より云ふ時の方角）に配した理由は、高祖（日蓮）の所在を丑寅（北東）に配することを配慮したがためと考えられる。

京都妙覚寺、要法寺のように祖師堂の規模を釈迦堂より大きくすることはなかったものの⁴³⁾、祖師堂の位置を重要視していたと考えられる⁴⁴⁾。そして、虚空会の宝塔を意味する三重宝塔を祖師堂の前方に東面して配している。

その後、享保15年（1730）に本堂、大門を残すほか、ほとんどの堂宇を焼失している。そして、天明8年（1788）の大火でも類焼している。焼失後の寛政2年（1790）には12間四面の仮本堂が再建されているが、祖師堂は再建されていない⁴⁵⁾。

まとめ

京都日蓮宗16箇本山寺院の内、妙覚寺、要法寺を除いた全本山寺院において釈迦堂が中心的堂宇としての性格が強く、釈迦堂中心の伽藍配置となっている。また、釈迦堂と祖師堂を配した9箇本山寺院が釈迦堂を右側、祖師堂を左側（仏の方より云ふ時の方角）に配している。

しかし、妙蓮寺と本隆寺の2箇本山寺院は、その逆に配している。

そして、日像によってとり入れられた三十番神信仰は三十番神社として要法寺、寂光寺を除いた全本山寺院に建立されている。

一、立本寺は文禄3年（1594）に京極今出川に寺基を動かしている。この地における中枢伽藍の主要堂宇の配置は釈迦堂を南面させ、その前方東南に西面して祖師堂、西南に東面して刹堂を鼎立して配している。この配置は日蓮書写の文字曼荼羅の立体的配座に則って配されたと考えられる。

その後、宝永5年（1708）に類焼し、内野に移転している。この地における主要堂宇の配置は、祖師堂と刹堂の位置が逆となっており、刹堂は鬼子母神堂と改称されている。

この要因は、二王門（楼門）が再建されなかったこと、そして、守護神が十羅刹女から鬼子母神へと変換えされたがためと考えられる。

一、妙満寺の中枢伽藍の主要堂宇の配置は、釈迦堂が南面し、高祖堂（祖師堂）を左側（仏の方より云ふ時の方角）に配されているが、立本寺の配置と同様に日蓮書写の文字曼荼羅の立体的配座に則って配されたと考えられる。

そして、釈迦堂に向かって左側に番神社、同拝殿、鳥居が配され、鳥居の西側に三光堂が配されている。

日蓮宗一致派に属する立本寺の主要堂宇の配置と異なるところは、守護神堂である。立本寺では刹堂（鬼子母神堂）であったが、日蓮宗勝劣派に属する初期妙満寺では三光堂であったと推察される。

その後、三光堂の主体である日天・月天・明星の三光天は三十番神に包含され、三光堂は形骸化したものと考えられる。

そして、中枢伽藍の主要堂宇たる釈迦堂、祖師堂、三光堂が鼎立する配置が崩れたものと考えられる。

一、妙蓮寺の中枢伽藍の主要堂宇の配置は、釈迦堂が南面し、祖師堂が右側（仏の方より云ふ時の方角）に併置されている。その理由は高祖（日蓮）の所在を丑寅（北東）に配することを配慮したがためと考えられる。

このことは京都妙覚寺、要法寺のように祖師堂の規模を釈迦堂より大きくすることはなかったものの、祖師堂を重要視していたがためと考えられる。

註記

- 1) 櫻井敏雄：鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究、東京大学学位請求論文、pp.387～408、昭和52年8月
- 2) 拙稿：近世京都日蓮宗妙顕寺、妙覚寺、要法寺の伽藍配置、日本建築学会計画系論文報告集、第402号、pp.119～126、1988年8月
- 3) 『妙本寺文書』、堀日享編『富士宗学要集』第2巻「相伝・信条部」p.299、1975年
- 4) 『本尊論資料』第式編諸山相伝、p.118、昭和16年、身延山専門学校出版。
- 5) 『日蓮宗事典』、東京堂、p.743、昭和56年
- 6) 『本満寺文書』、梅木正雄『本化別頭仏祖統記』、p.432、昭和55年、本満寺刊。この書は身延山久遠寺第36代日潮（1748歿）著。
- 7) 前掲書『日蓮宗事典』、p.743。
- 8) 「立本寺境内景観」、『新編法華霊場記』巻第二所収。本書は天和元年（1681）から貞享2年（1685）にかけて編まれたもので、貞享3年（1686）木版本として出版された。
- 9) 『山州名跡志』巻之二十、（『新修京都叢書』第19巻、p.231）光彩社、昭和43年。開版は正徳元年（1771）であるが、「山州名跡志序」は元禄15年（1702）に書かれていることから、この年には脱稿していたものと考えられる。
- 10) 前掲書、櫻井敏雄『鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究』、p.397によれば、本圀寺（京都市下京区当時）の二王門（西面）の位置は不自然で、天正19年（1591）に南の二町を本願寺に譲った時に二王門は致し方なく西側に移された可能性があらうと指摘されている。このことから本圀寺の二王門の位置は頂妙寺と同様に本堂（釈迦堂）の正面に配されていたものと推察される。
- 11) 拙稿：日蓮の教義・行儀と伽藍観、日本建築学会論文集、第343号、p.162～164、昭和59年9月
- 12) 日蓮歿後、法華経の解釈において法華経二十八品の内、前半十四品（迹門）と後半十四品（本門）に勝劣がない

- という立場をとっている側を日蓮宗一致派で、勝劣があるという立場をとっている側を日蓮宗勝劣派と呼称している。
- 13) 『妙顕寺文書』, 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗学全書』, 第19巻「史伝旧記部」歴祖部第二之四, p. 18, 昭和49年
 - 14) 前掲書『日蓮宗事典』, p. 947。
 - 15) 前掲書, 梅木正雄『本化別頭仏祖統記』, p. 442。
 - 16) 『立本寺文書』, 立本寺所蔵。
 - 17) 『山城名跡巡行志』第一, (『新修京都叢書』第10巻, p. 50) 光彩社, 昭和43年。
 - 18) 「立本寺伽藍配置図」, 立本寺所蔵。寛政元年(1789)の作製, 大きさ縦34 cm, 横52 cm。
 - 19) 「立本寺境内景観」, 『都名所図会拾遺』巻一, (『新修京都叢書』第12巻, p. 29) 光彩社, 昭和43年
 - 20) 『妙覚寺文書』, 妙覚寺所蔵。櫻井敏雄「洛中法華宗本山妙覚寺の伽藍と遺構」, (『近畿大学理工学部研究報告』第12号, pp. 37~38 所収, 昭和52年3月)。
 - 21) 前掲書, 『日蓮宗事典』, p. 58。
 - 22) 前掲書, 『日蓮宗事典』, p. 57。
 - 23) 前掲書, 『日蓮宗事典』, p. 733。
 - 24) 「美濃守様御本陣 妙満寺絵図」, 京都府立総合資料館所蔵。延宝6年(1678)の作製, 大きさ縦39 cm, 横50 cm。この絵図には, 本堂裏に本陣用の馬屋と馬取部屋と表門脇と番神社拝殿西側に馬つなぎが書き入れられている。
 - 25) 「妙満寺主要堂宇配置関係図」, 「美濃守様御本陣妙満寺絵図」は不鮮明なところがあるので, 同絵図より中枢伽藍の主要堂宇を起した。
 - 26) 前掲書, 『山州名跡志』巻之二十, (『新修京都叢書』第19巻, p. 237)。
 - 27) 拙稿: 日蓮の教義・行儀と伽藍観, 日本建築学会論文報告集, 第343号, pp. 162~164, 昭和59年9月
 - 28) 『妙満寺文書』, 前掲書『日蓮宗学全書』, 第5巻「顕本法華宗部」, p. 118。
 - 29) 拙稿: 中世における日蓮宗富士門流の伽藍と建築 その1, 日本建築学会論文報告集, 第331号, pp. 123~129, 昭和58年9月
 - 30) 「妙成寺境内配置図」, 『重要文化財妙成寺開山堂及鐘楼修理工事報告書』, 昭和29年11月所収。
 - 31) 宮崎英修『日蓮宗の守護神』, 平楽寺書店, p. 93, 1977年
 - 32) 『雍州府志』第二, (『新修京都叢書』第3巻, p. 236) 光彩社, 昭和43年
 - 33) 「本興寺伽藍配置図」, 本興寺所蔵。天和3年(1683)以前のもの, 大きさ縦180 cm, 横100 cm。
 - 34) 『尼崎市史』第10巻, p. 675, 1974年
 - 35) 「妙満寺伽藍配置図」, 妙満寺所蔵。大きさ縦110 cm, 横80 cm, この伽藍配置図には「天明焼失前之古図」と記されている。
 - 36) 山根日東『妙満寺概観』, p. 14, 昭和16年1月
 - 37) 前掲書, 『日蓮宗事典』, p. 735。
 - 38) 『妙蓮寺史』, 妙蓮寺刊, p. 67, 昭和57年
 - 39) 前掲書, 『山州名跡志』巻之二十一, (『新修京都叢書』第19巻, p. 265)。
 - 40) 「妙蓮寺伽藍配置図」, 妙蓮寺所蔵。寛延元年(1748)の作製, 大きさ縦150 cm, 横110 cm。
 - 41) 妙蓮寺所蔵。この書は往昔の記録を集めた『妙蓮寺記』(大正11年4月謄写)に所収されている。
 - 42) 『本成寺文書』, 前掲書『日蓮宗学全書』, 第7巻「法華宗部」, pp. 288~289。
 - 43) 拙稿: 近世京都日蓮宗妙顕寺, 妙覚寺, 要法寺の伽藍配置, 日本建築学会計画系論文報告集, 第402号, pp. 119~126, 1989年8月。妙覚寺については, 前掲書, 櫻井敏雄『鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究』, p. 428によれば, 「寛永6年祖師堂建立の時点で本堂より大規模となり, 実質上の本堂の態をなしているように考えられる。」と指摘されている。
 - 44) 拙稿: 日蓮の教義・行儀と伽藍観, 日本建築学会論文集, 第343号, p. 164。日我(1586歿)の『化儀秘決』に「本尊の示書にも日蓮は左り, 書写の人は右, 去る間本尊堂は左り, 御影堂は右, 御影堂は左り, 客殿己下は右なり」とある。「本尊の示書」, すなわち文字曼荼羅には, 日蓮の署名と花押が左り, 「書写の人」, すなわち本山寺院の歴代の買主は右に署名と花押を記している。これに則って本尊堂は左側, 御影堂は右側(仏の方より云ふ時の方角)に配するか, また, 御影堂を左側に配する場合は客殿己下は右に配するとしている。この配置方法に則っている本山寺院は大石寺, 重須本門寺があり, 御影堂(祖師堂)が重視されている。
 - 45) 前掲書, 『日蓮宗事典』, p. 735。

(1990年8月3日原稿受理, 1991年4月8日採用決定)